異世界を巡る冒険者

佐藤　和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界を巡る冒険者

【Ｎコード】

Ｎ８７６２Ｏ

【作者名】

佐藤　和樹

【あらすじ】

何とか流の継承者だとか、やたら勉強ができるとか、そういったことの一切ない平々凡々な高校生である鳴海颯太。彼がある日、銀色の鏡のような物に吸い込まれて異世界へ！

しかし、その世界で待ち構えていたのは……悪の秘密結社だった！？　辛くもその組織から逃亡した颯太は組織を倒すべくさまざまな異世界を巡ることになる。

果して颯太は悪の野望を打ち砕けるのか！？

※ジャンル変更しました。

追記、世界観にタイトルが合わなくなってきましたので改題しました。いろいろ変えて申し訳ありません。

第零話　召喚

第零話　召喚

鳴海颯太は目の前の物体に困惑していた。住宅街の細い道路の真ん中に、鏡のように銀色に輝く物体が浮かんでいるのだ。

「いかにも異世界とかに通じてますっ！　みたいな感じだな」

颯太は物体に対して呆れたように言うと、携帯電話を取り出した。そして、物体をバッチリと写真に写してメールで送る。するとすぐにメールを送った悪友から電話がかかって来た。

『もしもし、今のメールマジか』

『マジだ。どうしたらいいだろ』

『飛び込むしかないだろ！　リアルル〇ズとかに会えるかもしんないぜ！』

颯太は自分の友人がそういう人種だったことを思い出した。彼は疲れたような顔になったものの、すぐに気を取り直して会話を再開する。

『……まったくオタクの上山らしいな。もっと現実的な対応はないのか』

『さあ？　リアルに考えるなら放っておくしかないんじゃね？』

『確かにそうだよな。それじゃまた』

『またな～』

颯太は電話を切ると、携帯を制服のポケットにしまった。彼はそのまま物体を気にせずに歩き去ろうとする。ところがここで、物体が勢いよく当たりの物を吸い込み出した！

「うおお！？　吸い込まれる！　くそ、負けてたまるかぁ！　ファイト、いっぱ～つ！」

颯太は近くの電信柱にしがみついた。吸い込まれてたまるかと必死だ。颯太は気合いで体中の力を振り絞る。しかし、普通の高校生である彼の力などたかが知れていた。彼はどんどん吸い込む力を増していく物体の前に少しずつ力負けしていく。そしてとうとう、最後の指が電信柱から離れた。

「ふわあああ～！」

こうして、痛烈な叫び声だけを残して鳴海颯太は地球から消えた。

★★★★★★★

「いたた……おおお！？」

颯太が痛みで目を覚ますと、目の前にかわいい女の子がいた。髪は銀色で肩にかかるぐらいの長さで、顔は端正で人形のよう。はかなげな印象の青い瞳は吸い込まれそうだ。とにかく、美少女というのが相応しい女の子だった。

「ごめんなさい……」

女の子は俯きかげんでつぶやいた。目が潤み、氷の結晶のように冷たく光る。

「な、泣かないでくれよ。俺は何も怒っちゃいないぜ」

颯太は目を潤ませて、今にも泣き出しそうな女の子を必死に慰めようとした。勝手に呼び出されたことを怒ってはいたが、今はそれより女の子が泣かないようにするのが優先だ。

「ううっ、ごめんなさい。ううっ……」

「誰かいないのか？　俺には手に負えないぞ」

颯太は笑いかけたり散々努力はした。しかし、とうとう女の子は泣き出した。一人では手に負えなくなった颯太は助けを求めるべく辺りを見回す。だが、颯太と女の子のいる部屋には、魔法陣のような物が床で怪しく光るほかは、真っ暗で何も見えなかった。颯太はその暗闇に気味が悪くなったものの、泣き止まない女の子のために誰かいないかと呼びかけ続ける。

しばらくしてようやく女の子が泣き止んだ。すると部屋に光が差し込んできた。颯太と女の子は光の差した方向に振り向く。白髪で、白衣を着た老人が立っていた。髪は手入れしていないのかボサボサで、彫りの深い顔は陰険な老人の顔を絵に描いたようであった。

「おや、ずいぶん時間がかかっていると思ったらもう勇者が召喚されているではありませんか。困りますねえ、すぐに知らせてくれないと」

「白神博士、私は良いと言うまで部屋には入らないでと言ったわ」

女の子は男に不快感をあらわにした。しかし、男は意にかいさない。

「あまりにも遅いからですよ。巫女、あなたは自身がどれだけ組織にとって重要なのだか分かっておりますかな？　あなたに万が一のことがあれば私の首など簡単に飛んでしまうのですからね」

怪しい男は女の子にそう言うと、颯太を値踏みするような目で見た。颯太は何がなんだか分からずにキョトンとした顔をする。それとは対象的に、女の子は射殺すような目で男を睨みつけた。

「ふむ、なかなか資質はあるようだな。君、私についてきたまえ」

「すまないんだけど、俺に事情を説明してくれないか？　いきなりここに召喚されて、わけがわかんないんだけど」

「巫女は何も言わなかったのか？」

「俺が召喚されるとすぐに泣いちゃって」

「困った人だ。よろしい、この私が説明しよう」

男は女の子の方を困ったような目で見た。小さく舌打ちして。颯太はそのことに苛立ったが、男の説明に耳を傾けることにした。

「まず、自己紹介しようではないか。私の名前は白神狂一。君の名前は？」

「鳴海颯太だ」

「良い名前だ。そうだな、最初に君がなぜ呼ばれたのか話すとしよう」

男は大きく息を吸い、間を置いた。颯太も息を呑み、男の目をみる。男の目はからかうような愉悦を帯びていた。女の子はその様子を何も言わずに見据えていた。その唇からスッと紅い筋が滴る。

「君が召喚された理由は、我々『ネオ・ヘスラー』の戦闘員の改造素体となるためだ」

そう告げた男の瞳が、冷徹に輝いた……。

第零話　召喚（後書き）

感想・評価をお待ちしております！

第一話　秘密結社

第一話　秘密結社

秘密結社ネオ・ヘスラー。三流特撮映画にでも出てきそうな名前だが、非常に恐ろしい悪の組織だ。彼らは高度な技術力を保有し、次元を超えて世界と世界をまたにかけて活動している。ある時は地球によく似た世界、またある時は魔法の跋扈する世界といった具合に。そんな彼らの野望はすべての世界の征服。そのために、すでに技術力の低い魔法文明の発達している世界を中心としてすでに百を超える世界を落としている。

しかし、すべての世界を征服するという彼らの野望を成し遂げたためにはまだまだ膨大な戦力が必要であった。そこでネオ・ヘスラーは異世界召喚魔法を利用することにした。

異世界召喚魔法。この魔法は本来、危機に陥った国や世界が異世界から強力な勇者などを召喚するために使う魔法である。だが、ネオ・ヘスラーはその魔法を使える数少ない人間を拉致して自分達の戦闘員を召喚するために使わせているのだ。

「やめろ、やめてくれえ！」

そんな異世界召喚魔法の犠牲者の一人である鳴海颯太は現在、絶叫していた。薄暗い室内に聞くに堪えない叫び声がこだまする。彼は両手両足に頑丈な金具を付けられ、手術台のような物に固定されていた。

そんな彼の身体にロボットアームのような物が迫っていた。その

無骨な三本指の先には小さな針が光っている。颯太はそれを身体に刺されまいと必死にもがいているのだ。

「暴れるものではありませんよ。あなたはこれから栄えあるネオ・ヘスラーの戦闘員になれるのですからねえ」

ガラス越しに颯太の様子を見ていた狂一が口元を歪ませた。彼は颯太の悲鳴を無視して喜々とした顔でロボットアームを操作する。針が颯太の首筋に刺さった。麻酔薬が流入し、颯太は苦悶の表情のまま眠りに落ちた。

★★★★★★★

颯太が眠りに落ちてから数時間後。いよいよ改造手術は最終局面まで来ていた。

「後は洗脳するだけ。ふふ、良い戦闘員ができたものです」

狂一は想像以上に高い能力を持っていた颯太に感心していた。異世界から召喚された勇者というのは強大な魔力や身体能力、そして飛び抜けた特殊能力を持っている場合が多い。

そして、颯太もその例に漏れてはいなかった。颯太の場合、身体能力や魔力はそれほどでもないが特殊能力が素晴らしかった。

「さて、それでは」

喜び勇んで狂一は目の前にあるコンピュータ画面の赤いボタンをクリックしようとした。そこを押せば、洗脳作業が始まって颯太の改造は完了する。狂一の手が伸びて、マウスに接近していく。

あと数センチ、そこまで迫ったところで喧しい足音と共に男が手術室に入ってきた。彼は作業を中断して男を睨む。

「なんだね。私は今忙しいのだよ」

「それが、施設内に侵入者がありまして。現在こちらに接近しておりますので博士にも避難していただきたく……」

「なんだと？　馬鹿な、何者が侵入したのだ」

男の報告に狂一は首を捻った。そして男に疑わしげな視線を向ける。狂一の知る限り今のところネオ・ヘスラーに敵対するような大規模な組織はなかった。またこの施設の存在する世界はすでにネオ・ヘスラーの支配下にあり、知的生命体はすでにほとんど絶滅しているはずだった。

「どうやら現地種族の数少ない生き残りのようです。大型爬虫類のような生き物が人間型に変化して侵入して来ました」

「アレイめ、危険な知的生命はすべて絶滅させたといっていたが、どうやら見逃していたようだな」

狂一は戦闘力は凄いが頭の残念な同僚を思い出して顔を紅潮させた。そしてさらに忌ま忌ましげに拳を握りしめる。

「それで侵入されたのは仕方ないかもしれん。だが、戦闘員どもはどうしたのだ。そんな連中くらい追い払えるだろう」

「いえ、それが侵入者たちの戦闘力は非常に高く、ここにいる三級

以下の戦闘員では歯が立たないのです」

狂一は男の言葉に納得した。戦闘員にはランクがあり、勇者などの召喚者を改造したようなランクの高い戦闘員はこの施設にはいなかったのだ。

「まったく、仕方ないな。まさか巫女は奪われたりしていないだろうね」

「もちろん大丈夫です。すでに避難していただいておりますから」

「ふむ、良かった。ならばここはおとなしく逃げるとしよう。ここには巫女以外にはさほど重要な物はないからね」

「わかりました。あちらに船が手配してあります」

男は狂一に部屋を出るように促した。すると彼はコンピュータの電源を落とすと、拳銃で撃った。銃口から青白いプラズマが輝く。コンピュータの画面が焼け焦げ、シュウッと煙りが出た。

「これでよし、データは安全だ。そうだ忘れていた。君、ここにいる改造中の戦闘員を運び出してくれ」

狂一は男にそう命じると、自身はすでに用意されている逃亡用の船へと向かった。手術室の金属製の厚い扉が閉められる。男は狂一が立ち去るのを敬礼で見送ると、ガラスの向こうの颯太へと向かった。そのまま男は颯太の手足の金具外して、颯太の身体を運びだそうとした。すると、ここで男にとって想定外のことが起きた。

「うーん、ここは……」

麻酔が効いているはずの颯太が、瞼を擦りながら目を覚ましたのだ。

第一話　秘密結社（後書き）

感想・評価をお願いします！

第二話　ドラゴン少女と改造人間（前書き）

今回は違う視点からの話です。

第二話　ドラゴン少女と改造人間

第二話　ドラゴン少女と改造人間

金属に覆われた無機質な通路の中を、白い一団が走っていた。けたたましいサイレンが鳴り響き、壁の穴から数えるのもバカらしいほどの光線が降り注いでいる。しかし、一団はその弾幕を気にすることなく走り続けていた。

「今のところ抵抗は激しくありませんわね。これならなんとか巫女を救出できそうですわ」

「ほほ、どうやらあの恐ろしい連中は留守のようですからな」

集団の先頭にいた少女と老人が笑いあった。彼らはもうまもなく施設の最深部に到達する。それにもかかわらず、彼らの心配していた強敵は現れずに、代わりにそれによく似た雑魚ばかりが現れていた。

「また変なのが現れましたわね。邪魔ですわよ」

少女の前方の通路いっぱいに、箱のような物体が現れた。銀色の箱は、少女の姿をしっかりと捉える。箱の上に付けられているカメラが不気味に光を反射した。

「侵入者確認。排除セヨ」

箱こと警備マシンは無機質に告げると、膨大な熱量を持った青白い光線を放った。通路の中を熱が駆け巡り、壁が赤熱する。少女は

眼前に迫った光線を舞ってかわした。柔らかな金髪がたなびき、豊かな稜線を描く膨らみが波打つ。

「みなさん大丈夫？」

「姫、今の攻撃で二人やられました」

「なんてことですの！我がドラゴン族の戦士がやられるなんて！」

部下がやられたことに少女は青ざめた表情をして、唇をギュッと結んだ。しかし彼女はすぐに前を向き直した。少女の翡翠色の瞳が警備マシンを射る。

少女の身体が跳んだ。その華奢なはずの白い拳が弾丸のように警備マシンにめり込む。装甲を貫かれたマシンは青くスパークすると、粉々に爆散した。

「倒れたものは仕方ありませんわ……。今はとにかく先を急ぎましょう」

倒れた部下を通路の端に寄せると、少女たちは再び奥に向かって走り出した。彼女たちは焦り出していた。彼女たちの一族にとって最も大切な巫女。それがこの施設に囚われているはずだったのだが、まだ見つかっていないのだ。もうまもなく最深部だというのに。

そんな焦りもあって彼女たちの速度はますます速くなった。幸いなことにさきほどのような強力な存在は現れない。彼女たちは迷宮のような通路を右へ左へと先へ進む。

すると突然、前方の通路に取り付けられていた扉が吹き飛んだ！

通路に埃がもうもうと立ち込める。

「何かいますわ！」

少女は煙る通路に影を見た。ゆらゆらと揺らめく影はやがて確かな像を結ぶ。恐怖で塗り潰された黒髪に、見る者に死をさそう闇色の瞳。　それは三ヶ月前に現れ、少女たちの世界を破壊と殺戮で支配した『改造人間』たちとまったく同じ香りがした。

「こ、こないで下さいまし！」

恐怖と絶望に囚われた少女は安息を求めて後ろに下がっていく。しかし、魔王すら及ばぬ終末は身体を揺らしながら、ひたひたと少女に迫った。恐怖に絡めとられた少女の部下たちは、歩み寄ることすらできない。

「い、いやぁ！　死にたくない！」

「落ちついて！　なんでそんなに怖がるんだよ！」

世界の破壊者と呼ばれた存在と同じ気配の少年は、驚くほど気弱そうな声で叫んだ。

★★★★★★★

「それじゃあ、あなたは敵じゃないのですね？」

「ああ、改造されてはいるみたいだけど精神的には普通の日本人だ」

「日本人？」

「そこは気にするな」

颯太は殺気だっていた少女と部下たちをやっとの思いで宥めると、自分のことを説明した。少女たちは限りなく疑わしげな顔をした。しかし、一応納得はしたらしく、険しい表情のままではあるが颯太の説明にうなずいた。

「それでは自己紹介をしませんこと？　一応は仲間になりましたことですし」

「そうだね、なら俺から。俺は鳴海颯太。聖海学園一年だ」

「私はメル・レルーナ。最強にして誇り高きドラゴン族の姫ですわ」

颯太とメルは互いに手を取り合い、握手をした。この世界でも握手は地球と同様な意味を持つようだ。

「ねえ、今ドラゴンっていったけどさ、ドラゴンってあのでっかい奴？」

メルと手を離した颯太はすぐにそのことを尋ねた。颯太の知識通りなら、ドラゴンは山のような身体を持つ最強クラスのモンスターはずだった。

「ええ、そのドラゴンですわ」

「え、ならなんで人間と同じ姿なのさ」

「魔法で変身しているのですわ。ほら、そこのあなた、戻ってみなさい」

メルは最後尾にいた男を指差した。颯太は人を指差していいのか

と思ったが、姫なので問題ないのだろう。
メルに指示された男は両手を広げると何やら唸り出した。周りにいた男たちはすぐに男から離れる。男の唸り声はますます激しさを増していった。彼の身体が青白い稲妻を散らし、空気を焦がす。男の身体が一瞬膨らんだように見えると同時に、光があたりを包んだ。

「すっ、すげえ！」

颯太は目の前に現れた紅いドラゴンに大興奮した。すぐに近づいていって身体の隅々まで執拗に眺める。

「おお、ドラゴンの翼はこうなっているのか……」

「あの～、私たち急いでいますからこれぐらいにしてくださいな」

「あ、そうなの。ごめんごめん」

颯太は頭をかきながらドラゴンから離れた。すると、ドラゴンは人からドラゴンになるときとは違って、あっという間に人に変身する。

「それでは巫女を探しに行きますわよ」

メルは部下たちに号令をかけて走り去って行こうとした。それを颯太が押し止める。メルは何事かという顔をしたが、素直に立ち止まった。

「ちょっと待って。その巫女って銀髪で蒼色の目をした子じゃない？」

「ええ、そうですわ！　もしかして知っていますの！」

メルは颯太の瞳をまっすぐ見つめて、颯太に詰め寄る。颯太は身体に当たる柔らかい感触に頬を真っ赤にした。

「その子なら、えーと……確かあっちにいるはずだ！」

「ありがとうございますわ！」

颯太は巫女と出会った真っ暗な部屋の方向を示した。メルたちは颯太の言った方向にすっ飛んでいく。颯太はそれを見て置いていかれまいとした。

「俺も連れて行ってくれ！」

「わかりましたわ！　なら急いで下さいましね！」

颯太の申し出にメルは走りながら快諾した。こうして颯太とメルは基地の最深部へ向かって駆け出した。

第二話　ドラゴン少女と改造人間（後書き）

感想・評価をお願いします！

第三話　思考生命体（前書き）

この小説に評価がどんどんついている！　作者はすごくびっくりしてます！

第三話　思考生命体

第三話　思考生命体

颯太とメルたちは基地の最深部に到達していた。照明が落ちていて、通路は薄暗い。敵にはすでに抵抗する戦力も無くなっているのか、颯太たちの足音だけがせわしく響いていた。

「確かそこだ！」

颯太が分厚い扉を指差した。独特の存在感と威圧感を放つ扉に、メルの手がかけられる。鋼が軋み扉が悲鳴を上げた。

「巫女、巫女！　助けに来ましたわ」

何もない空間をメルの声が通り抜けた。返事はなかった。ただ、幾何学を描く魔法陣だけが虚しく輝いている。

「颯太さん！？　いませんわよ！」

「きっと移動したんだ！」

「くうっ、もっと確実な情報を言って下さいまし！」

メルは腹立たしげに扉を蹴飛ばすと、また走り出した。その後を颯太とメルの部下たちは慌てて追いかけた。メルはよほど焦っているのだろう、目が血走っていた。

「行き止まり……。巫女は？　どこへ行ってしまったんですの！」

通路の突き当たりで、メルは錯乱状態に陥った。それを彼女の部下たちが抑えようとする。しかし彼女の力は強く、なかなか抑えることができない。

「落ち着いて下され！　姫、姫ぇ！」

彼女の部下の老人が声を枯らして叫び続ける。それを見た颯太は、メルの肩に手をかけて強引に抑えつけた。そして彼女の目を真っすぐ見据えた。

「事情は詳しく知らないけど、みんなが困ってるだろ。落ち着け、落ち着くんだ」

「ううっ！」

颯太に抑えつけられたメルは、頭に血が上っていたのが収まったのか、ようやく落ち着いてきた。彼女は颯太の手を引き離すと、大きく息を吸って背筋を伸ばす。

「私としたことが、皆さんに迷惑をかけましたわね」

「無理もありませぬ。巫女は姫の妹君。それがいなくなってしまったのですから、取り乱しても仕方ないことです」

「そう言ってもらえると助かりますわ」

萎れたようなメルに、老人が優しく声をかけた。それに応えてメルの表情も明るさを取り戻す。その様子は孫娘と祖父のようであった。

「今頃聞くのは何だけど……。巫女ってどんな存在なのさ？　さっきはめちゃくちゃ急いでたみたいだったから聞けなかったんだけど」

さっきまでとは違ってゆっくりと歩き出したメルに、颯太は巫女について尋ねてみた。雰囲気から大切な存在らしいとはわかったが、それ以上は分からなかったのだ。

「巫女というのは私達王族から選ばれる存在で、王以上に権威がありますの。ドラゴン族で最も高い魔力を持っていて、ただひとり異世界召喚魔法を使える存在でもありますわ。彼女を失うということは我々にとって一番あってはならないことですわね」

簡単な説明であったが、大体のイメージが颯太にはつかめた。颯太はメルに向かってわかったとうなずく。すると近くにいた老人が、その説明にさらにつけ加えた。

「今の巫女は姫の妹君、フィーリアさまです。だから姫はこんなにも必死なのですよ。姫と巫女さまは仲良しでしたからなぁ」

「じ、じいっ！　変な顔をしないでください！」

いかにも好々爺然のような顔をした老人に、顔を朱に染めるメル。恥ずかしい思い出でもあるようだ。

一行は束の間の間和気あいあいとした空気になった。しかしそれも少しの間だけ。すぐに張り詰めた雰囲気に戻った彼らは、最深部の部屋を念入りに調べ始めた。壁から床から目を皿にして、耳を擦りつけ、徹底的に何かないかと調べる。もしかしたら警察より念入りかも知れないぐらいに。

「風の音？」

魔法陣のある部屋で、颯太の驚異的な聴力がわずかな音を捉えた。颯太は床に耳を張り付ける。台風の日に、電線が鳴るような音が聞こえてきた。

「下になにかある！」

「えっ、扉なんてありませんわよ？」

「隠されてるんだ。ちょっと待ってて」

颯太は床に手を滑らせ、感触を確かめる。滑らかな床に一カ所だけゴツゴツとした感触の部分を確認した。颯太はそこを思いっきり殴りつけた。床が揺れ、中華鍋を叩いたような音が幾度となく響く。

「結構頑丈だ！　手伝って！」

「わかりましたわ。みなさんも手伝ってくださいまし」

颯太は予想外に頑丈な隠し扉に舌を巻いていた。改造人間となって以来、彼の攻撃を防いだ物は始めてだった。

メルと部下たちは颯太と共に床を叩き始めた。床が揺れ、隠し扉にかけられた鍵が歪み始める。

火花が走った。隠し扉が開き、颯太たちは下に真っ逆さまに急降下する。

「こ、これは一体なんですの……」

「コンピュータ……かな……」

颯太たちが下に落ちると、想像できないような光景が広っていた。円筒形の空間が地の底まで続けていて、その中心を彩色豊かな光を放つ無機質な物体が貫いている。その物体は八角形で、羽虫が羽ばたくような音を出していた。それはまるで宇宙船の中心部のようだった。

「あなたたちは侵入者？」

「誰だ！」

颯太たちの背後から声がかかった。颯太たちは振り向くと同時に戦闘態勢を取る。するとそこには巫女によく似た少女が立っていた。

「巫女！　無事だったのですわね！」

「違うわ。私は彼女の姿を借りているだけ。ほら、目の色が違う」

少女は興奮するメルに、自身の右目を示した。深紅の瞳がそこにはあった。巫女ならその目は蒼色のはずである。

「じゃ、じゃああなたは何者ですの！」

「私は高次元量子思考生命体開発コード２２８３よ」

突如現れた謎の少女は、颯太たちにはさっぱり理解できない肩書きを名乗ったのだった。

第三話　思考生命体（後書き）

感想・評価をお願いします！

第四話　コンピュータとネーミング（前書き）

話がなかなか進まない……すいません！

第四話　コンピュータとネーミング

第四話　コンピュータとネーミング

薄暗く、無機質な空気に満ちた空間で、謎の少女と颯太たちは向き合っていた。颯太たちの目つきは刀のようで、顔は険しい。

「君の言うことを総合すると、君はここのコンピュータの管理を任されていた、えーと……」

「高次元量子思考生命体よ」

「そうそう、高次元量子思考生命体。で、俺たちがそのプログラムとやらを解除したら味方をしてくれると」

颯太は少女のした小難しい話を極限まで大雑把に要約した。少女は理解力のない颯太に呆れたような顔をしていたが、とりあえずうなずく。

ちなみに颯太の要約に足りない部分を補うと、少女の話はこうであった。彼女はこの基地のコンピュータを管理するために造られた試作の人工生命体である。わかりやすく言うと意思や自我がある機械のような物だ。ただし、ロボットのような存在ではなく、実体を持った情報体というのが適切だろう。

そんな彼女は長年この基地でコンピュータの管理をしていたのだが、このたび基地が廃止されることになった。仕事の無くなった彼女はこの基地から出て行こうとした。ところが彼女は、自身も知らない間に人間にしか解除できない設定のプログラムで、コンピュータに縛り付けられていたらしい。

そこで、颯太たちがそのプログラムを解除したら仲間になってく

れると言うのだ。

「でもそれは本当なのかしら？　私達を騙そうとしているような気がしますわね」

メルと部下たちは胡散臭そうな目で少女を見た。それに対して少女は無表情なままメルたちの方を向く。そして少女はメルたちに静かだが強い口調で言った。

「私にまだ名前はない。だからあなたたちが私の名前を決めていい。これで少しは私のことが信頼できるようになるはず」

「私達に名付け親になれと言うのですか！　確かにそれなら信用できるようにはなりますけれど……本当にそれでいいんですの！」

メルと部下たちは少女の申し出に口をあんぐりと空けた。どよめきが怒涛のように広がる。　名前を付けるということは、相手のすべてを支配するに等しい。逆に名前を付けてもらうということは、相手にすべてを預けるということと同じという考えがこの世界にはあった。これを少女はメルや颯太たちに提案しているのだ。

「そうですわね……。わかりましたわ。私があなたに素晴らしい名前を付けてあげましてよ」

メルは顎に手を当てて考え込んだ後、腰に手をそえて高らかに宣言した。少女は期待に満ちた柔らかな目でメルを見る。

「スペシャル・プリンセス・エリザベータなんて素晴らしい名前はどうかしら？」

「嫌。とっても嫌！」

「あらそうですの？　こんなに素晴らしいのに」

青を通り越して紫色になった少女は、身振り手振りも交えながら、全力でメルの提案した名前を拒否した。メルは自分のセンスの無さがわからないのか、ぶつぶつ少女に対する文句をつぶやき続ける。

それを見兼ねたメルの部下の老人が前に出てきた。老人はもったいぶるように咳ばらいをすると、自分の考えた名前を披露する。

「姫はネーミングセンスがいまいちですからなあ。ここは私が付けましょう。東方風に山田太郎なんてどうでしょうか」

「根本的に何かが違う！」

「そうですか？　わかりやすくていいと思うのですが……」

老人は萎れたような顔をしてすごすごと後ろに下がっていく。メルたちへの落胆をかくせない様子の少女は、颯太を見つめた。少女の澄み切った紅い瞳と、夜の闇のように黒い颯太の瞳が交錯する。

少女の言いたいことがわかった颯太は、すぐに脳内検索エンジンを起動して少女の名前を考え始めた。颯太は肩をすくめてウンウンと唸る。しばらくしてようやく、颯太の頭に良い名前が思い浮かんだ。

「イコなんてどうだろう？」

「それで良いわ。決定」

少女あらためイコは、スーパープリンセスが良いだの一郎が良い

だのと言い争っているメルと老人を無視して自分の名前を決定した。二人は不満がありそうな顔をしたが、周りのの雰囲気に圧倒されて口をつぐむ。

「名前が決まったわ。早速プログラムを解除して欲しい」

「わかった。それでプログラムはどうしたら解除できるのさ」

「このコンピュータルームの最下層に入力用のキーボードがあるわ。そこに私が指示するコードを打ち込んで欲しい」

「それだけでいいの？」

「ええ、そうよ。キーボードには向こうのエレベーターから行けるわ」

イコは自分たちのいるベランダのように張り出した空間の端を指差した。そこには小さなエレベーターらしきドアがあった。

「じゃあ俺が行ってくる。機械の操作がわかるのは俺だけだから」

颯太とイコはエレベーターに向かって歩き出した。すると、彼らの後ろから良く通る甲高い声が聞こえてきた。

「私もついていきますわ。あなたたちだけでは不安ですもの」

「でしたら私も！」

「俺も姫について行きます！」

メルが颯太について行こうとすると、その部下たちも我も我もとついて行こうとする。みんなよほどメルのことが心配なのか、必死だ。

「エレベーターの定員は三人まで。四人以上は無理」

イコはきっぱりとした口調でそう言ってのけた。メルの部下たちは仕方なくその場で動くのをやめた。そして、みんな話すこともやめてメルの目を見る。

「姫、お気をつけて！」

直立不動でみんな一斉に胸に手を当て、頭を下げた。メルはそれに手を振って応える。みんな笑顔であった。

「そろそろエレベーターが来る」

エレベーターの脇に付けられていたボタンが青くなり、ドアが開いた。三人は無言ですばやく乗り込む。

三人はこうして最下層へと向かっていった。

第四話　コンピュータとネーミング（後書き）

感想・評価をお願いします！

第五話　三百と三万四千（前書き）

けっこう急展開です！

第五話　三百と三万四千

第五話　三百と三万四千

闇の堆積した地下深く。高級車のエンジンのように静かな音を立てるコンピュータの根元で、颯太はキーボードを叩いていた。男にしては細い指が踊り、目の前にあるモニターに数字が流れていく。

その様子を他の二人は真剣な眼差しで見守っていた。四つの視線が颯太の背中を焦がす。颯太は緊張から額に汗をたらした。

「これで終わり！」

颯太は最後とばかりに左端につけられていた大きなボタンを押した。コンピュータの動作音が変わり、赤い光が下から上に点っていく。最上部が赤くなったところで、モニターに拘束プログラム解除と表示された。

「ありがとう。助かったわ」

「たいしたことないよ。それよりもこれからよろしくな」

「ええ、もちろん」

颯太とイコはがっちりと握手をした。続いて、イコはメルとも握手をかわす。　三人の表情は晴れやかで、明るい雰囲気に満ちていた。

「さて、用は済んだようですわね。じいたちのところに戻りますわよ」

しばらくした後で、メルはそういって来た道を戻ろうとした。
すると、突如としてやかましい警報音が響き渡った。

「どうなっていますの颯太さん！」

「俺に聞いても俺にはわからん！」

「ちょっと待って。調べてみる」

メルと颯太が鳴り響く警報音や点滅する光に驚いて慌て出す。しかし、イコは冷静だった。彼女はコンピュータに近づくと、その冷たい表面に直接手で触れた。イコの手がぼんやりと淡い光を発する。イコは目を閉じて、そのままじっと動かない。そして数十秒後、彼女はようやく言葉を発した。

「基地内部に侵入者。おそらく本部から来た戦闘員よ。推定レベルは三万四千、現在第三区画を第二区画方面へ移動中」

イコが険しい表情でそう告げると、モニターの画面が切り換わった。さっきまで数字しか表示されていなかった画面に、女の姿が映し出される。

「あれが侵入者なのか？　あまり強そうには見えないな」

「そうですわね。だらしなさそうでみるからに弱そうですわ」

画面の向こうの女は黒い将校風のコートを着崩し、大あくびをしていた。和風美人だがあまり締まりのない顔で、お世辞にも強そうには見えない。

「弱いなんてとんでもない。ああ見えても推定レベル三万四千よ」

イコは弱そうな敵に拍子抜けしたような二人に、鋭い目をして言った。その顔はまさに真剣そのもの、迫力に溢れていた。イコに圧倒される二人。しかし、二人にはどうしてそんなに警戒するのかわからなかった。

「あいつが強いってことは良くわかったけど、具体的にどれくらいなのさ。さっきから推定レベルとか言ってるけど基準がわからないよ」

「レベルというのはその人の持つ身体能力、魔力を総合して表す単位。高ければ高いほど強いわ。普通の冒険者がだいたい十ぐらいってところね」

「ということはさっきの女は冒険者の……三千四百倍！」

メルと颯太の顔から血の気が一気に抜けていった。二人は目を大きく見開いて、再びモニターをみる。女は悠々と基地の中を歩いていた。

「ち、ちなみに私たちのレベルはどれくらいなんですの？」

「頭を貸して。今から測ってみるから」

イコはメルと颯太の額に手を当てた。そして、しばらく目をつぶってぶつぶつつぶやいた後に手を離す。二人はわらにもすがるような目でイコを見つめた。しかし、イコは重い口を開くと二人にとって衝撃的なことを告げた。

「メルが二百二十の颯太が三百よ……」

「えっ……」

「そ、そんな……」

二人が石化した。二人のまわりに形容不能な沈黙が訪れる。二人とも一万ぐらいはレベルがあると思っていた。

「冗談ですわよね？　私は冒険者をまとめて千人ぐらいなら倒せますわよ」

「本当よ。低く思えるけれど、平均的な魔王や勇者が二百から二百五十ぐらいのレベルだからあなたたちのレベルは妥当な数値」

イコは淡々とメルに言う。しかし、その顔はどこか苦しそうであった。メルは押し黙り、無力感のあまり俯く。

こうしている間にも、女はゆっくりだが確実に近づいてきていた。彼女は階段を下り、基地の深部へと向かってくる。

「まっすぐこちらに向かっている……！」

女は地図でも持っているのか、最深部の方へ一直線に歩いていた。しかも、すでに廃棄予定のボロボロになった基地などどうでも良いのか、進行方向にある壁などを破壊して突き進んでくる。

「このままだとあと三分以内にこの場所まで到達されてしまう……。急いで逃げるわよ」

イコはコンピュータから離れると、それを挟んで空間の向こうにある扉へと歩いて行こうとした。颯太もイコと一緒に歩いて行こうとする。だが、メルはもときたエレベーターの方へと向かった。

「どこ行くんだ！」

「じいたちを迎えに行くんですわ」

「そうか、そういえば……でも時間が」

「あなたは私に部下を見捨てろと言う積もりですの！」

「そういう訳ではない。だけど……」

「だけどもへったくれもありませんわ！　私は行きますからね！」

メルは颯太を突き放すと、走り出した。するとイコがその背後に迫り、首筋に手を添えた。電撃が走り抜けたようにメルの身体が痙攣した。その足は止まり、身体はその場で崩れ落ちる。

「イコさん……何を……」

「ごめんなさい。あなたを無駄死にさせたくはなかった」

「……あとで覚えてなさい……」

メルはそう言い残して気絶した。イコは女性にしては割合大柄なメルの身体をその小さな身体で軽々と抱き上げる。

そして呆気に取られている颯太にメルを預けると、自身は前に立って走り出した。

「こっちにまだ船があるはず。それで逃げるわ」

「わかった！」

走り出したイコと颯太はこの言葉をかわすと、その後は一心不乱に走り続けたのだった。

第五話　三百と三万四千（後書き）

感想・評価をお願いします！

第六話　旅立ち（前書き）

次回からいよいよ本格的に旅が始まります！

第六話　旅立ち

第六話　旅立ち

細く、闇のはびこる通路を颯太とイコは走っていた。硬質的な足音が耳に響く。二人は険しい顔のまま、脇目もふらない。

「あの扉の向こうよ」

「オッケー！」

イコが遠く前方に見える扉を指差した。来る者を拒むような重厚な扉だ。

颯太とイコは速度をさらに上げて扉に迫った。近づけば近づくほど扉は威圧感を増していく。しかし、颯太たちはそんなことお構いなしに扉の前に立った。颯太は扉を開けようと手を伸ばす。

扉が大きく揺さぶられた。だが、頑強な扉は開こうとはしない。

「開かない、鍵がかかってる！」

「いま開けるわ」

イコは扉につけられていた端末に触れた。ものの十秒とかからずに、電子音が鳴り扉の鍵が解除される。

鍵が解除されるやいなや、颯太は扉をスライドさせた。金属が軋む耳障りな音を出して扉が開く。

「すげえ……」

颯太は扉の向こうの圧倒的な光景に目を奪われた。人を吸い込むような暗闇が、地下とは思えぬ広大な空間に広がっていた。そのところどころに小さな明かりが点り、トンネルの中のような黴臭い空気を醸し出している。

そんな空間の奥に、弱々しく光を反射する一隻の宇宙船のようなものがあった。流線型の船体は鉛色に光り、船首に向かってすぼまるような紡錘形。窓に当たるガラスのような部分には、この船が経てきた年数に比例する厚い埃が積もっていた。

その古ぼけた船の側面には何故かアルファベットで「クアーズ」と刻まれていた。

「あの船よ」

「あれか？　なんか……ぼろくない？」

「大丈夫。クアーズはまだまだしっかり飛べる」

イコは不安そうな顔をした颯太を置いて、一足先に船へと向かう。闇を通り抜けた彼女は、そのところどころ錆び付いた船体に手を置いた。窓に明かりが点り、船が眠りから覚める。

音もなく船のドアが開かれた。イコは船に乗り込み、ドアから身を乗り出す。

「早く来て！」

イコは目一杯手招きをして、颯太を急かした。颯太はメルの身体をおんぶし直すと、その足をしっかり掴む。颯太が駆け出した。風と闇を切り、船に向かって矢のように走る。その強靭な脚力によってまたたく間に到着した颯太は、船の中に滑り込んだ。

船の中は白を基調としていて、広々としていた。正面に大きな窓

と操縦桿や機械類があり、その後ろには座席が四つある。颯太は近くにあった座席にメルを座らせると、自身もその隣に座った。イコは颯太とメルが席に着いたのを確認すると、ドアを閉めて操縦席に座る。

「早速出発するわ。急がないと追っ手が来る」

イコは操縦桿を握った。二股に別れたゴム質の操縦桿が淡く光る。計器が動き出し、船内がにわかに慌ただしくなる。

船が振動を始めた。心地好い振動が疲れた身体に眠気を誘う。だが、その振動は突然止まった。

「くっ、エンジンの調子が悪いわ」

「おいおい、大丈夫なのかよ？」

「すぐに良くなるはず。心配しないで」

イコは目を閉じて機械を操作することに集中を高める。エンジンが再びかかった。しかし、またすぐに止まってしまう。イコは怪訝な顔をすると、機械類をあれこれと弄り始める。調子の悪い場所を探したり、ついには揺らしたり。だがなかなかエンジンは動かない。

「そろそろやばいんじゃないか」

「わかってる。だけどエンジンが……」

焦り始める二人。その額にツウッと冷や汗が滴る。空気が張り詰め、機械を操作する音だけが聞こえる。

いよいよ壊れてしまっているのかと、颯太が心配し始める頃、つ

いにまたエンジンが動き出した。今度こそエンジンは止まることなく順調に出力を上げていく。

「ふう、これで安心」

イコと颯太は緊張の糸が解けた。イコは船が転移するように設定すると、座席にもたれかかる。颯太も体重を座席に預けてウトウトとした。

格納庫に耳を破壊しそうなほどの爆音が轟いた。颯太とイコは起き上がり、窓に張り付く。二人の目に吹き飛ばされ、ダンボールのように引き裂かれた扉の残骸が飛び込んできた。二人は裂けてしまいそうなほど目を開き、扉のあった位置を見た。さきほどモニターで見た女が獰猛な光を湛えた目でこちらを見ていた。

「私の計算ではあと二十秒は時間があったはず。どうして！」

「ちくしょう、もう少しだったのに！」

恐怖と絶望に颯太とイコの心は塗り潰された。身に染み渡る圧倒的な負の感覚に二人はただ叫ぶことしかできない。

一方、女は船の姿を視界に捉えると右手を高く上げた。エネルギーが渦巻き、邪悪な力の結晶を形作る。それは手の平にすっぽりと収まる程度の大きさでしかなかった。だが、紫色のそれは見た目に反して強力無比な存在だった。

「ふふ……」

女の顔に凄惨な笑みが宿った。女は愉悦に顔を歪めたまま、手の平のエネルギー弾を船に向かって放とうとした。腰を引き、手を後ろに下げる。

「お、終わりだぁ！」

「助けてぇ！」

船の中の二人は無駄だとわかっていても背を屈めて、その時を待った。

しかし、破滅は訪れることはなかった。二人は恐る恐る窓の外を覗く。

「ドラゴンだ！」

「メルの部下の人ね。まだ生き残っていたんだわ」

なんと、どこからか現れたドラゴンが女を押し潰していた。颯太とイコは歓声を上げる。だが、ドラゴンは颯太たちに早く逃げろと言わんばかりにしきりに咆哮を上げていた。その様子を見たイコはすぐに逃げる準備を再開した。

「よし、何とか間に合った。クアーズ、次元ワープ！」

イコはそう高らかに宣言した。それと同時に、船が七色の光に包まれる。慌てた女はドラゴンを投げ飛ばしてすぐにエネルギー弾を乱射するが、時すでに遅し。颯太たち三人を乗せた船は次元の狭間へと旅立っていった。

こうして颯太たちの長い長い世界を巡る旅が始まったのだった。

第六話　旅立ち（後書き）

うーん、ここまでの文章を読んで見るとどうにもファンタジーらしくないなあ……。ジャンルを近い内に変更するかもです。

第七話　はじめまして魔法世界（前書き）

今回は短めです。

第七話　はじめまして魔法世界

第七話　はじめまして魔法世界

透き通るような蒼の空間。そこには色とりどりの球体が浮かび、時折たなびく虹色の靄がどこまでも広がっていた。

蒼と球体の色が美しいコントラストをなす中を、一隻の次元船が飛んでいた。その船体にはクアーズとかかれている。

「これが超次元空間よ。空みたいに見えるから次空なんて呼ぶ人もいるわ」

「ああ、うん……すげえ……」

操縦桿を握っているイコが、窓の外の景色に目を輝かせている颯太に言った。颯太は半分上の空でイコの話を聞き流す。彼はさっきからずっと、窓を覗いては感嘆したようにため息をついてばかりいた。

「う、うーん……」

颯太とイコが何となく噛み合わない会話を続けていると、メルが身体を揺らした。彼女は目を擦り、よろよろと起き上がる。颯太とイコは互いに顔を見合わせた。

「変な場所……はっ！　イコさん、颯太さん！　あれから何がありましたの！」

「落ち着いて。私たちは無事にネオ・ヘスラーの基地から脱出した

わ。今はこの船であの世界とは別の世界に向かっているところ」

「じゃあじいたちはどうなりましたの？　ここにはいないようですけれど……」

「それは……」

三人に重苦しい沈黙がのしかかった。エンジンと計器の立てる微かな音だけが流れていく。

メルの額から汗が滴り落ちた。ここでようやく、颯太がその重い口を開く。

「確認したわけじゃないけど……たぶん全員殺されてしまっただろうな……」

「……やはりそうですか、仕方ありませんわね。元より死は覚悟の上でしたわ」

メルは顔を伏せた。さらに着ている白いローブを使って顔を覆う。啜り泣く声が口から漏れ聞こえてくる。イコも颯太もやるせなさのあまり、その様子を見ていられない。

二人が顔を下に向け、メルから目を離した時、メルは懐から鋭利なナイフを取り出した。そしてそれを振り上げ、自らの胸元に向かって振り落ろす！

「何をするんだ！」

間一髪、メルの異変に気がついた颯太がナイフを掴んだ。彼はそのままナイフを押し曲げると、後ろに払い落とす。メルは使い物にならなくなったナイフを呆然と見つめた後、颯太に敵意剥き出しの

視線をぶつける。

「どうして死なせてくださらなかったのですか！　一族の者がみな死んだのに私だけおめおめとは生きられませんわ！」

「馬鹿！　あいつらはメルが死んでも悲しむだけだぞ！　お前は生きろよ！」

「そんなの押し付けですわ！　彼らだって私が名誉を守って死ぬことを望みますわよ！」

そこから二人の押し問答が始まった。激しい言葉の応酬が繰り広げられる。

それがしばらく続き、二人の息も上がり始めた時だった。

「メル。私たちはね、あなたの部下のおかげで基地を脱出できたの。あなたの部下は間違いなくあなたが生きることを望んでいた」

黙っていたイコがようやく口を開いた。穏やかで、それでいて強い意思を感じさせる声が船内を満たす。そのイコの言葉は不思議とメルの心に届いた。

「今の言葉、本当ですの？」

「ええ……。あなたの部下のドラゴンが私たちを逃がすため、あの女を足止めしたわ」

「そんな……」

激昂していたメルは振り上げていた拳を降ろした。彼女は肩をす

くめて、黙り込む。その表情は虚ろでどこか遠くに想いを馳せているようであった。

「決意はそのうちで良いんじゃないか？　死ぬことならいつでもできる」

颯太はメルの肩に手をかけて言った。メルはただ無言で頷き、そして笑う。その泣き腫らした頬がほんのり赤かったのは、泣いたからだけではなさそうだった。

「よかった。さあ、もうそろそろ着くわよ！」

「えっ、着くって？」

「さっき言ったのに、聞いてなかったのね……。私たちはネオ・ヘスラーに狙われているわ。だから、様々な世界を巡って対抗するための力を蓄える必要があるの。だから今、強力な魔法のある世界を目指しているのよ」

「なるほど」

颯太は頷くと、改めて窓の外に注目した。メルも席から身を乗り出して窓を覗く。船はオレンジに輝く巨大な球体に迫っていた。球体はこちらを誘うように揺らめいている。

「突っ込むわ。少し揺れるわよ！」

イコは操縦桿を前に倒し込んだ。船の中の重力が一瞬軽くなり、船体が急加速する。

「うわあああ！」

「ぶ、ぶつかりますわああ！」

船が球体に真っ正面から突入した。船体が大きく揺れ動き、メルと颯太は席にしがみつく。船を光が包み、船内を閃光がほとばしる。目が焼けるような光に三人が目を閉じると、次の瞬間には窓の外が闇に浸されていた。いくつもの星明かりが窓から船内に差し込んだ。

「着いたわ。世界ナンバー27、キューリウスよ」

真っ先に視力を回復したイコが窓から周りを見て言った。颯太たちも周りを見てみると、そこには夜の闇に覆われた深い森が広がっていた……。

第七話　はじめまして魔法世界（後書き）

感想・評価をよろしくお願いします！

第八話　森の主（前書き）

この小説……いよいよファンタジーかどうか怪しいなあ……近いうちにジャンル変更するかも。

第八話　森の主

第八話　森の主

鬱蒼と生い茂る森の中に、颯太たちは降り立った。森特有の湿った空気が彼らの頬をなで、木々の臭いが鼻をつく。彼らは辺りを見回して何かないかと観察するが、どこまで見ても周囲はただの森だった。

「本当に別の世界なんですの？　私にはあまり元の世界と変わったようには見えませんわ」

「異世界といっても基本的な生態系は変わらないわ。違いが分からなくても無理はない」

「へえ、そういうものなんですの」

メルは関心したような目でイコを見た。すると、イコはどことなく得意げな顔になる。そして、どんと胸を張った。小柄な彼女には不釣り合いな膨らみがたぷたぷと波打つ。

「それはいいけどさ、これからどうするんだ？　このままじゃ何にも始まらないぞ」

周辺の様子に夢中になっていた颯太が思い出したようにイコに尋ねた。イコは自身の胸にまったく視線を向けなかった颯太に、悔しいような腹立たしいような気分になる。イコの頬が飴でもなめてるかのように少し膨れた。しかし、膨れながらも彼女は颯太の質問に答えた。

「私の持っている情報によると、この先に大きな街があるわ。まずはそこに向かう。先のことはそれから」

「そうだな。まずは人に会わないと。道はわかるのか？」

「まかせて。ネオ・ヘスラーのコンピュータにはあらゆる世界の地図情報が入っていたわ。だから私も地理には詳しい」

「そうですか。それなら早速行きますわよ」

「ちょっと待って」

メルが会話に割り込んできた。彼女はそのまま姫だからか、リーダーのように宣言すると出かけて行こうとした。だがそこで、イコが早速出かけようとするメルを止めた。彼女はメルと颯太に勝手に出かけないように、と言って船に戻る。そして、船の中にある機械をいじった。

不意に、船の姿が景色に溶けるように消えた。メルと颯太は驚いて、船のあった場所に戻る。二人は目を凝らして消えた船を探した。しかし、船はどこにもない。

「どうなっていますの！」

「俺にも分からん！」

二人は驚きのあまり顔を見合わせて叫ぶ。その腰はすでに抜けてしまいそうだった。

「私が船をしまったのよ」

森の木陰からイコがひょこっと現れた。メルと颯太はお化けでも出たようにびくりと震えた。

「イコ、びっくりさせないでくれ」

「そうですわよ！　心臓が止まるかと思いましたわ！」

「ごめん……少し驚かせたかっただけなの」

イコはしゅんとうなだれた。その反省した様子に二人は険しかった顔を緩ませる。

「そんなにあやまらなくていいよ。少し驚いただけだから。それで、船はどこにやったのさ？」

「船は異相空間に格納したわ。放置していたら見つかった時に大変だもの」

颯太とメルはイコの言った言葉の意味が良く分からなかった。特にメルは科学の知識がまったくないので、颯太よりもさらに意味が分からない。なので、ポカンと間抜けに見えるぐらい口を開けていた。

「異相空間？　なんですかそれは。居候の親戚ですの？」

「違う。異相空間というのはここと微妙にずれた空間のこと。そこに様々な物をしまって置けるのよ。それで、しまった物を取り出す時はこの鍵を使えばいつでもどこでも取り出せるの」

イコはそういって懐から小さな棒のような物を取り出した。人差し指より少し太くて長いぐらいのそれは、黒くて五角形をしていた。確かに何かの鍵のように見えなくもない。颯太とメルはとんでもない道具の登場にしばし呆然とする。

「……実はイコってネズミが嫌いだったり、百年ぐらい未来のロボットだったりしない？」

「そんなわけないわ。それよりも早く出発しない？」

颯太のおバカな発言にそっけなく答えたイコは早く出発するように二人を急かした。まるで何かに追い立てられているようだった。

「よし、じゃあ出発しよう！」

数十秒後、颯太たちは街を目指して夜の道を歩き出した。森の中は闇に包まれていて、不気味な静寂に満ちている。その中を三人はメルが魔法で作った小さな明かりだけを頼りに歩き出した。

「街はまだですの～？　私、歩くのには慣れておりませんわ」

三人が歩き始めてから三十分ほどたっただろうか。ここでメルが駄々をこねだした。お姫様育ちで歩くのには慣れていなかったらしい。颯太やイコに向かってどれだけ歩かせるつもりかと不満を漏らす。だが、ドラゴンだけあって体力はあるのか速度は落としても歩くこと自体は止めない。

「そろそろ休憩にしましょう」

メルの文句に耐え兼ねたイコが、休憩することを提案した。する

と、メルは颯太の答えを待たずに近くの石に腰掛ける。颯太はそんなメルのわがままな態度に眉をひそめたものの、口にはしなかった。

「さてと、もう出発しましょう。急がないと」

五分と経たない内にイコが座っていた岩から立ち上がった。その様子はどことなくそわそわして落ち着きがない。そのことに気がついたメルと颯太は怪訝な顔をする。

「さっきからあなた焦ってませんか？　一体何があるというのですの？」

「実はこの森、真夜中を過ぎると……出たわ！」

イコは空中を指差した。颯太とメルはすぐにイコの指差した方に顔を向ける。すると、二人の顔が見る見ると血の気を失っていった。彼らは肩をがくがくと震わせ、歯をかちかち鳴らす。

「ドラゴン！？」

「違いますわ！　ドラゴンはあんな風に透けたりしません！」

周囲の巨木に比べても圧倒的に巨大な身体に、空を覆わんばかりに広げられた翼。そのような身体を持つ生き物が視線の先にはいた。その身体から放たれる威圧感や迫力などは他の生物を震えさせ、怯えさせるには十分過ぎるほどだ。しかし、これだけでは三人はあそこまで恐怖はしなかっただろう。三人が恐怖に包まれた最大の理由、それはそのドラゴンのような形をした生き物が水の固まりのような、何か透明なもので構成されていることだった……。

第八話　森の主（後書き）

感想・評価お願いします！

第九話　力の片鱗（前書き）

今回が今までで最長です。

第九話　力の片鱗

第九話　力の片鱗

闇深き夜明け前の森で、颯太たちは恐ろしい魔物と遭遇していた。その月明かりに透ける魔物の身体に、颯太たちは魂を吸い込まれるような恐怖をかきたてられる。身がすくんでしまった彼らは互いに顔をつき合わせた。

「イコ、あれは何だよ！」

「スピリットドラゴン！　ネオ・ヘスラーの危険魔物リストに載っていたわ！」

「あんなのがいるなら言ってくれよ！」

「言おうとしたら出てきたの！」

颯太たちは混乱とその身にせまる恐怖から口論になった。しかし、そうしている間にもスピリットドラゴンは颯太たちにゆっくりと近づいてくる。その何も映さない虚ろな眼が颯太たちを捉え、その単純な本能がそれを獲物だと認識した。

「そうだ！　メル、お前はドラゴンだっただろ？　あいつを説得してくれ！」

スピリットドラゴンがもうその息遣いまで感じられそうなほど近づいた時、颯太が妙案を思いついた。そして期待に満ちた目でメルを見る。メルは颯太のその視線に、首を勢い良く横に振ることで応

えた。

「無理ですわ！　あんなのと話せるわけないでしょう！」

「やっぱ無理かよ……戦うしかないか」

メルにきっぱりとダメ出しされた颯太はスピリットドラゴンを見据え、構えを取った。彼は鷹のような目でその朧げな身体に狙いを定める。

一瞬の静寂。そして颯太が跳んだ。右足を真っすぐ伸ばし、スピリットドラゴンの鼻に当たる部分に痛烈な蹴りを繰り出す。だが……

「すり抜けた！！」

颯太の動きを見ていた二人が悲鳴を上げた。なぜか颯太の身体はスピリットドラゴンを突き抜けてしまったのだ。

「攻撃が通用しないのか……」

木々を薙ぎ倒して地面に落ちた颯太は、埃を払いながらそうつぶやいた。イコは急いで颯太に駆け寄り、メルはスピリットドラゴンを睨みつけた。

「これなら……フレイア！」

メルの手から炎が噴き出した。燃える炎が夜空を焦がす。炎はスピリットドラゴンの身体をなめるように覆いつくした。

「グギャアア！」

スピリットドラゴンは悍ましい雄叫びを上げると、その長い尾を振り回した。しなる鞭のように風を斬った尾はメルに直撃し、その身体を吹き飛ばす。

「メル！」

二人の叫びが重なり、森にこだました。二人は顔を凍りつかせ、地面に伏したメルを見つめる。すると、メルはすっくと起き上がった。その目には怒りの炎が燃え盛っていた。

「もう許しませんわ！」

メルは怒りにまかせて空へと舞い上がった。そして、スピリットドラゴンに向かって次々と蹴りやパンチを放つ。残像すら見えそうなほどの速度だった。だが、それらの攻撃はスピリットドラゴンの身体をすべてすり抜けてしまう。

「ギャオオオ！」

スピリットドラゴンの口に光が灯った。蒼炎がまばゆく輝き、熱量が離れていた颯太やイコまでも伝わってくる。

「危ない、逃げて！」

イコが叫ぶと同時に炎が放たれた。それは空を焼き尽くしながらメルに迫る。

メルはその身を翻した。炎は長い髪をかすり、わずかに焦がす。彼女が後ろを向いて見ると、森が一面炭になっていた。

「あんなの当たったらひとたまりもありませんわ！」

驚愕に顔を染めたメルは助けを求めるように颯太たちの方に走った。颯太たちはメルと合流すると、森の奥へと逃げて行く。
その後しばらく全速力で走った三人は大きな岩を見つけた。三人は迷うことなくその岩の陰に隠れる。

「これからどうしますの？　あんな化け物、勝てませんわよ」

「でも、すぐにここも見つかるわ」

イコは逃げた獲物を求めてさまようスピリットドラゴンの姿を指差した。イコの言う通り、じきに見つかってしまうだろう。

「じゃあどうすればいいんだよ！」

「そうね……。ここはあなたに賭けるしかないわ」

イコは颯太をじっと見つめた。見つめられた颯太は戸惑い、自分で自分を指差す。

「俺！？」

「そうよ。あなたはたしかネオ・ヘスラーの戦闘員だったわよね」

「たしかにそうだけど……」

「だったら何かしらの特殊能力があるはず。それであいつを……」

イコがそこまで言ったところで颯太が青い顔をしてイコの言葉を遮った。イコはきょとんとして颯太を見る。

「そんなの俺にはないぞ！」

「う、嘘。そんなはずない！」

「嘘も何も本当にない！」

「うっ、嘘じゃなさそうね……」

颯太のあまりの剣幕にイコは彼の言っていることが本当らしいと考えた。仕方ないので彼女は顎に手を当て、必死に打開策を考える。人間の脳とは比べものにならない性能の量子頭脳がフル回転して、数千もの計算を瞬時にこなしていく。

「勝率が三割を切るけれど……魔力弾を使うしかないわね」

「魔力弾？　なんだよそれ」

イコの発した言葉を颯太はおうむ返しした。颯太には何のことかさっぱりだった。イコはそんな颯太の言葉に真剣な眼差しのまま答える。

「あの女がやって見せたようなエネルギー弾のことよ。あなたにも出せるはず」

イコの言葉を聞いた颯太は、手の平に光の弾を作っていた女のことを思い出した。そして後ろに後ずさり、顔の前で無理だと言わんばかりに手を振る。

「あんなの地球人の俺に出せるか！　あんなことできるのは某戦闘

民族だけだ！」

「あいつもあなたも同じネオ・ヘスラーの戦闘員よ。威力はともかくあいつに出せてあなたに出せない道理はない」

「そりゃそうだけどさ……」

「時間がない。試すだけでもいいからやって」

「私からもお願いしますわ。あなたができないと私たちここで死んでしまいますわよ！」

イコとメルはここぞとばかりに畳み掛けた。颯太は地面に手を叩きつけると、目を閉じ神経を研ぎ澄ます。意識が身体の内部に潜り、脈拍、呼吸、身体に関わるすべてが感じられるようになった。

「ううむ……」

「暖かい力、それを感じるのよ」

唸る颯太はイコの指示にしたがって暖かい力を感じるように努めた。すると、身体の中心になにかポカポカと暖かなものを感じた。

「感じた！　感じたぞ」

「よし、そうしたら次はその力を手に集めることを意識してみて。それで魔力弾が形成されるわ」

颯太は全身に力を込めて力を移動させるように意識した。徐々に力の塊が移動していくのが感じられ、手の平に淡い光が現れる。

「すごい……レベル三百でこれだけの魔力弾ができるなんて……」

形を成し始めた魔力弾にイコは感嘆の声を上げた。彼女は驚きと関心が入り混じったような表情をしていた。その様子をメルが不思議がる。

「そんなにすごいんですの？」

「ええ……私のデータが正しいならレベル二千以上の戦闘員でも難しいぐらいよ……」

「レベル二千ですって～！」

メルが驚き呆れたように叫んだ。しかし、それでもまだ颯太の手には魔力が集まっていく。それに危険を感じたイコは慌てて颯太を止めた。

「も、もう十分よ。これ以上魔力を加えるとかえって危険」

「そうか。それなら……」

颯太は魔力を貯めるのを止めると、岩の陰から出て行った。スピリットドラゴンはすぐにその姿を見つけて、突撃してくる。

「ウギャアア！」

スピリットドラゴンは鼓膜をつんざくような雄叫びを上げた。颯太は顔をしかめつつも、向かってくるスピリットドラゴンに狙いを

定め、右手を後ろに引いた。魔力弾は火花を散らし、一際激しい光を当たりに振り撒く。森は颯太の右手を中心に白く染まった。

「行っけええ！」

スピリットドラゴンが颯太をその口で飲み込もうとしたまさにその時。気迫のこもった咆哮と共に、颯太の手から光が放たれた……。

第九話　力の片鱗（後書き）

ついに主人公最強っぽい描写が入りました。ここに来るまで長かったです……。

第十話　仙人（前書き）

ついに颯太の能力が明かされます！

第十話　仙人

第十話　仙人

青い魔力弾がスピリットドラゴンの透き通った身体にぶつかった。光が弾け、スピリットドラゴンの巨大な身体を包み込んでいく。

「キシャアアア！」

断末魔の叫びが森に轟き、その直後、爆風が吹き荒れた。木々は根こそぎ抜け、地面は削られ窪んでいく。

「いやああ！」

「飛ばされてるうぅ！」

「おわ、おわああ！」

三人は風で空に舞い上がった。月に向かってロケットよろしく飛んでいく。そうしてしばらく空中散歩したあとで、彼らは元の場所が小さく見えるほど離れた場所に落ちた。幸い、三人とも頑丈だったことと、森の地面が腐葉土で覆われていて柔らかかったことで大怪我をした者はいなかった。

「いたた、もう少し威力を加減して下さいな！」

「ごめん……」

メルが腰をさすりながら真っ赤になって怒鳴った。文句の言えない颯太は肩をすくめて謝る。すると、メルはため息をつき落ち着い

た表情になった。

「はあ、これきりにしてくださいましね。ところでイコさん、もうあの化け物はいなくなりました？」

「ちょっと待って……。大丈夫、生命反応は消えたわ」

イコは窪地の方を注意深く観察すると、颯太たちの方に向き直ってにっこり笑った。それに釣られて颯太とメルも笑い出す。穏やかな表情を見せる月のもと、あたりが和やかな空気になった。

「颯太、確かめたいことがある。額を貸して」

ひとしきりみんなが笑った後で、イコが急に真剣な顔になった。そして颯太の頭に手を伸ばす。颯太はそのきつい眼差しにたじろいだが、とりあえず髪をかきあげ、額をさらけ出した。

「やっぱり……レベルが十五も上がっている。しかも上限レベルがないようね。なるほど、これが颯太の特殊能力なのね」

颯太の額に手を当てたイコがぶつぶつとつぶやいた。さらに何度もふむふむと頷く。何か重要なことがわかったようだった。

「何がどうなってるのか、俺たちにも分かるように話してくれないか？」

颯太とメルがイコの顔を覗き込んだ。三人の顔がぶつかりそうなほど接近する。暑苦しいのでイコは二人を下がらせると、説明をはじめた。

「分かった。説明するわ。いま私がわかったのは颯太の特殊能力についてよ」

「だからそんな能力ないってば」

「いいえ、ないように感じているだけ。実際にはちゃんとあるわ」

颯太は息をのみ、緊張した面持ちでイコを見た。メルもまた同様の態度を取る。風が走り抜けて、神妙なあらたまった雰囲気になった。

「颯太の能力は恐らく、倒した敵の力を奪うことよ。そして奪った力を自分の物とするの」

イコが能力を告げた途端、颯太の顔が間の抜けた微妙な感じになった。

「……それって普通に経験値もらってるだけじゃね？」

「全然違う。そもそもレベルというのは強い敵を倒したからといって急に上がる物ではないの。日々の鍛練によってゆっくりと上げていく物なのよ。だからこれは異常なこと」

イコは声に力を込めて、颯太の能力の凄さを力説した。しかし、颯太はああそうですかといった表情している。メルもいまいち良くわからないようだった。

「反応が悪いわね。まあ今のところは構わない。先を急ぎましょう」

そういうとイコは森を歩き出した。颯太とメルも後についていく。

暗く、足元の悪い森を三人は黙って歩いた。そのときは沈黙だけが三人の友だった。
不意に三人は木の陰に人のようなものを見た。緊張が走り、三人は身構える。
「おや、珍しいのう。この迷いの樹海に旅人とは」
老人が彼らの前に現れた。小柄で、白い髭を伸ばしている。顔に刻まれた皺は深く、かなり歳を取っているようだ。そして身長に比してかなり長めの杖も持っている。だが身体の方はいたって丈夫そうだった。
「私たちはこの先の街に行く旅人。私がイコ、こっちがメル、後ろにいるのが颯太よ。あなたは誰？」
「わしはこの森に住むじじいでエンスじゃ。さっき森が騒がしかったのでちと見に来たのじゃが、もう終わっておったようじゃのう」
「そうですか。それでは……」
イコは得体の知れない老人との会話を打ち切ると、早々に歩き去ろうとした。すると、老人はイコに向かって小さな袋を投げる。
「これは？」
「わしからの贈り物じゃ。中にはモルの実が入っておる。モルの実は腹が膨れるぞ。あれだけ派手なことをしたんじゃ、腹が減っておるだろうと思うてな」
「どうして知っているの？　あの時は誰もまわりにいなかったはず

よ……」

イコたちの顔は疑問でいっぱいになった。そして老人に怪しむような視線を送る。それを見た老人は豪快に高笑いをした。

「カッカッカ！　わしは森で暮らして長いからのう。森が何でも教えてくれるんじゃよ。だからこの森で起きたことはどんなことでも知っておるわい」

「そ、そう。なら今度こそ行くわ……」

底知れぬ老人に気味の悪さまで感じたイコや颯太たちはその場から速足で歩いていった。すると、それを老人が呼び止める。

「おーい、もしおぬしらが魔法を極めたいと思ったなら、またこの森に来るが良い。素質が十分にありそうなのでな。それでは呼び止めて済まなかった。達者でな」

老人はそれだけ告げると森の奥へと消えていった。颯太たちは振り向いてそれを確認すると、歩みを緩める。

その後、休憩したり、老人からもらった木の実をおっかなびっくり食べたりしながらも、何とか三人は無事に街に着いたのだった。

第十話　仙人（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十一話　異世界の街（前書き）

今回は颯太が決意する話です。

第十一話　異世界の街

第十一話　異世界の街

朝焼けに森が紅に染まる頃、颯太たちは街の前に来ていた。石づくりの建物の建ち並ぶ街は、狭い道がそこかしこを網目のように走っていた。早朝にもかかわらず人の姿がちらほら見られ、かなり都会のようだった。

「情報によるとここはサングースの街よ。まずは一休みしましょう」

「そうですわね。私は疲れてしまいましたわ」

イコとメルは早速街の中へと入っていった。二人とも疲れているのかヘロヘロだ。それを後ろから颯太が追いかけ、呼びかけた。

「それはいいけどさ、お金持ってるのか？」

「持ってない。だけど換金できるものは持っているわ」

イコは懐から小さな袋を取り出した。颯太はイコから袋を受け取り、中を覗き込む。中には黄金色に輝く豆粒大の金塊が入っていた。颯太は目を丸くして、イコを見る。

「どこで手に入れたんだよこれ！」

「ネオ・ヘスラーの船には現地での活動資金にするために金が積んであるの。クアーズにも少しだけど積んであったのよ」

「へえ、なるほど。確かにそうしておけば便利だな」
颯太は納得した顔でイコに袋を返した。イコは軽く微笑んで袋を受け取る。そうしていると、メルが前から二人を睨みつけてきた。
「何をしていますの？　早く行きますわよ」
メルは二人にそういうとすたすたと歩いていった。二人はやれやれといった顔をしてメルについていく。
街をしばらく歩いたところで、ベッドの絵が描かれた看板を掲げた建物を見つけた。三人は足を止め、建物の様子を観察する。二階建てで窓の数から察すると十部屋はありそうな建物だった。
「宿屋かしら？」
「この大きさとベッドの看板からおそらく」
「なら入ろうぜ。もうくたくただ」
颯太は観音開きのドアを開けると中に入った。中は落ち着いた雰囲気で、正面にカウンターがあった。奥には食堂のようなスペースも見える。どこの世界も朝早くに出発する旅人はいるようで、すでに何人か食事をしていた。
颯太たちは宿屋の様子を一通り見ると、目の前のカウンターにいたおっさんに話し掛けた。
「部屋は空いてるかい？」
「ああ、空いてるぜ。上と中と下があるがどれにする？　それぞれ一万、八千、五千ルナだが」

宿屋のおやじが料金のことを告げると、イコが颯太の代わりにおやじの前に立った。彼女は袋を取り出し、金を少しだけ中から出す。

「私たちは長距離を旅するから、こうしてお金を金として持っているの。申し訳ないけど使えるかしら？」

「大丈夫だ。ちょっと待ってな」

おっさんはカウンターの中をがさごそと漁り、古ぼけた天秤と重りを取り出した。そして、その天秤でイコの出した金塊を量ってみる。

「一つ五万ルナってとこだな。釣りは銀貨で払うが、それでも良いなら泊まってきな」

「じゃあ、中の部屋を二部屋頼むわ」

「毎度あり。ほれ、釣りの三万四千ルナだ。部屋は二階の奥二部屋だぜ。食事は昼は十二時、夜は七時からだから楽しみにしてな！」

宿屋のおやじは階段を奥の指差して、実に良い笑顔をした。颯太たちはそれに軽く頭を下げると部屋に向かう。

部屋は南向きの日当たりの良い部屋だった。颯太は早速ベッドに潜り込み、すやすやと寝息を立て始める。

★★★★★★★★

太陽が空の中心に昇ったお昼十二時。いまだに眠りこけている颯太の部屋にイコとメルが入ってきた。

「まったく、寝相が悪いですわね」

メルは布団を蹴飛ばしていた颯太を見て眉を吊り上げる。そして次の瞬間、彼女は颯太の耳元で叫んだ。

「ご飯ですわよー！　起きなさーい！」

「うわああ！　耳がああ！」

颯太は耳を抑えてベッドから飛び起きた。メルは腰に手を当ててそれを見下ろした後、部屋から出ていく。部屋には颯太とイコだけが残された。

「私も先に行って待ってるわ。メルを一人にしておけないもの。颯太も準備が出来次第、一階の食堂にきて」

イコもそれだけ伝えると部屋から出ていった。一人残された颯太は鏡と洗面台を使って寝癖を直し、最低限の身嗜みを整える。それができるとすぐに彼も食堂に向かった。

「颯太の席はそこ」

食堂に着くと、すでにイコたちは食事を始めていた。颯太も彼女たちの隣に座り、食べ始める。スープに肉料理、サラダにパン、どれも暖かくてとてもおいしかった。

「颯太さん、もう少し丁寧に食べて下さるかしら」

「お腹空いてるんだよ。多少のことは勘弁してくれ」

半日以上ぶりのまともな食事に颯太は吸い込むようにがっついていた。それをマナーにうるさいメルが見咎める。二人の間に火花が散った。

「そんな小さなことはどうでもいい。重要なのはこれからのこと」

イコが些細なことで揉めている二人を仲裁すると、話題を切り替えた。二人は急に真剣な顔になる。

「それもそうですわね。今後はどうしましょう？　一応、私としましては巫女を奪還するために動くつもりですけど」

「私はみんなについて行くわ。私には帰るところも、行くところもないもの」

イコの視線が颯太に向いた。メルも颯太と目を合わせる。颯太は大きく深呼吸をして、考えを落ち着かせた。

「うーむ……なあ、イコ。ネオ・ヘスラーが地球を襲うことってあると思うか？」

「地球……たぶん襲うでしょうね。今のところは大丈夫でしょうけど、近い将来は危ないわ」

「そうか……」

颯太は黙った。そして、思考の海に埋没していく。二人は空気を読んで何も言わない。時の流れが滞り、遅くなる。彼らにはまわりの喧騒が別の世界の出来事であるかのようにさえ思えた。

熱々だったスープがぬるくなった頃、颯太がついにその口を開いた。澱んだ空気がにわかに揺れる。

「俺はこれからネオ・ヘスラーと戦う」

颯太の凛とした声が、食堂のざわめきに良く響いた。

第十一話　異世界の街（後書き）

感想・評価をお願いします！

第十二話　冒険者ギルド（前書き）

見てわかると思うのてすが、タイトルを変えました。ですが、これからもよろしくお願いします！

第十二話　冒険者ギルド

第十二話　冒険者ギルド

昼間のざわめく食堂。そこの一角にひんやりと重い空気が漂っていた。

「本当にそれで良いのね？」

「ああ、もちろん」

静かにイコの問い掛けに答えた颯太の目は、強い意志に溢れていた。イコはその目を真っすぐに見据えた。そして、深く頷く。メルもまた同様に頷いた。

「方針は決まったわね。ネオ・ヘスラーから巫女を奪還し、そして潰す。これが今後の私たちの行動目標よ」

イコはそう宣言すると、一枚の紙を取り出した。真っ白でコピー用紙より一回り大きい紙には、地図のような物が描かれている。颯太とメルは少し身を乗り出して紙を覗き込んだ。

「ここに描いてある世界がまだネオ・ヘスラーに侵略されていない世界で、修行ができそうな世界よ。当面はこれらの世界を回って力を蓄えたり、仲間を増やしたりしましょう。とりあえずレベルは三万五千、仲間は六人を目処にしておくわ」

「そうだな。レベルを上げないことには話にならないな。仲間も足りないし」

「私もその意見には賛成ですわ」

「なら決定。まずはこの世界で修行を開始しましょう。さっきちょうど良い施設の情報を手に入れたから、ご飯を食べたら早速行ってみようと思うわ」

「ちょうど良い施設？　なにそれ」

「見てからのお楽しみよ」

「ふーん、なら楽しみにしてよっと」

颯太たちはイコの言葉に頷くと、もぐもぐと食事を食べるのを再開した。三人とも食欲は素晴らしく、たくさん盛り付けられていた皿もすぐに空となった。

「ごちそうさま！」

三人は挨拶を済ませると、食器を返した。その時、食堂のおばちゃんが空になった食器の多さに苦笑いをした。三人は気恥ずかしさを感じてそそくさと外に出る。

「すげえ人。スクランブル交差点みたいだな」

「二人ともこっちよ！」

「ちょっと待って下さい！　私は人が多いところは苦手でしてよ」

三人が外に出て見ると、予想外に人が多かった。狭い通りを数え

切れないほど人が行き交っている。颯太たちは互いに呼びかけながら道を歩いていったが、途中で何度もメルが人に溺れた。

メルを救出したり、人波に押し戻されたりしながら三十分。夜とは違った感じに疲れた三人はようやく目的地に着いた。

「ここよ。ここが目的地」

イコが目的地だといった赤い煉瓦づくりの建物は、その辺のお店の五倍ぐらいあった。さらにその入口の周辺には鎧を着たごついおっさんやら、ローブを着たお姉さんやらがいる。

「もしかしてここって……」

颯太はその建物の正体を予想して目を輝かせた。いかにも興味津々でたまらないといった雰囲気だ。そんな颯太の手をイコたちは引っ張り、建物の中に入る。

「いらっしゃいませ。冒険者ギルドへようこそ」

中に入ると、すぐ正面のカウンターの受付嬢が挨拶してきた。颯太たちは軽く会釈すると、イコが代表して彼女と話を始める。

「こんにちは。新規登録したいのだけど、お願いできる？」

「はい、三人ですか？」

「ええ、そうよ」

「わかりました、少々お待ちくださいね」

受付嬢はカウンターの奥に入っていった。彼女が戻って来るまでの間、颯太たちはギルドの中を観察する。ギルドの中は赤い壁紙が張られていて、雰囲気は全体的にクラシカル。西部劇に出てくる酒場に清潔感と落ち着きを足したような感じだった。その中を個性的な鎧を着た冒険者たちがうろついている。彼らにはこわもてな人もいたが、いかにもならず者といった人はいなかった。

「お待たせしました。なにぶん新規登録をするのは久しぶりだったもので」

受付嬢が戻って来た。彼女は書類の束と、なぜか水晶球をカウンターの上に置く。そして胸ポケットからペンを取り出すと、颯太たちに手渡した。

「ここの欄に名前と年齢、出身地を書いてくださいね」

「ごめんなさい……私たち字が書けないの」

「あ、そうですか。それでしたら私が代筆しますね」

字が書けない人はたびたびいるのか、受付嬢は特に驚くことなく代筆を申し出た。イコは受付嬢に自分達の名前や年齢、さらに適当な出身地を伝える。出身地はおそらく地図情報から選んだのだろうが、特に疑われることはなかった。

受付嬢はすべての項目に記入を終えると、書類をしまい、水晶球をズイッと前に出してきた。そしてにっこり微笑み、颯太たちをみる。

「必要事項は記入できましたよ。あとは能力確認だけです。さあ、この水晶に触れてみてください」

颯太たちは誰から触るのかと顔を見合わせた。すると、メルとイコの二人が颯太をじっとみる。颯太はその雰囲気に負けて水晶球にゆっくりと触れた。

颯太に触れられた水晶球は赤、黄、青……と次々に色をかえていく。明るくて暖かな光が現れては消え、また現れを繰り返す。その光のスペクタクルに颯太たちだけでなく、周りにいた冒険者たちまでもが注目した。

「これは……」

水晶球は最終的に真っ青に落ち着いた。南国の深い海のような色だ。それを目の当たりにした受付嬢は言葉を失い、たちんぼうになる。

「えーと、青でこの純度ですから推定レベルは三百から三百五十……」

ギルドの時が止まった。受付嬢はおろか冒険者たちまで整然とその動きを止める。物音がしなくなり、室内は絶対的な静寂の空間となる。

「な、なんですの？　こういう空気は苦手ですわよ……」

唯一、事態についていけていないメルの焦燥した声が、一切の音が排除された空間によく響いた。

第十二話　冒険者ギルド（後書き）

最近、この小説の改訂作業に着手しました。大幅に変えることはありませんが、改行などをちょこちょこと。もしよろしかったら読んでみてくださると、ありがたいです。

第十三話　大混乱（前書き）

良いタイトルが思いつかない……。

第十三話　大混乱

第十三話　大混乱

冒険者ギルドは混乱状態に陥っていた。受付嬢は固まり、冒険者たちは大騒ぎをしている。困った颯太は受付嬢の肩を揺すり、無理矢理再起動させた。

「ふえ……すいません！　あまりにもレベルが高かったので……。えーと、次はそちらの方、測定をお願いします」

「私ですの？」

「はい、メルさん」

受付嬢は混沌とした状況をみて見ぬ振りをして、メルの測定を強行した。にわかに場が静まり、水晶球に注目が集まる。

水晶は赤に染まった。受付嬢はまたもや壊れた人形のように動かなくなる。

「レベル二百から二百五十……」

ギルドの中に呆れたような乾いた笑いが響いた。もはや笑うしかないらしい。精神的に追い詰められた受付嬢はもう自棄だ、と言わんばかりにドンと水晶球を差し出した。

「さあ、測るのですよ！　何が出ても驚きませんから！」

「私はそこまでレベルはないわよ……」

イコは口調が若干おかしくなった受付嬢に引きながらも水晶球に触れた。受付嬢や冒険者たちは固唾を呑んでそれを見守る。

水晶球は緑に落ち着いた。受付嬢が落胆したようなため息をつく。

「レベル五十代ですね。うーん、これでも普段ならびっくりしてひっくり返るところですけど……」

受付嬢は微妙な目つきで颯太とメルをちらちらとみた。イコはどこか不満なのか頬を膨らませた。

「別に私はレベルが高い必要はないけど……そういう態度をされると悲しくなるわ」

「ごっごめんなさい！　つい本音が……じゃなかった。とりあえず登録は完了しましたので、次はギルドのシステムの説明です！」

イコに恨みがましげな目で睨まれた受付嬢は、慌てて話題を切り替えた。書類を取り出し、ギルドの説明を開始する。

「まず、冒険者の基本は依頼の受注です。あちらを見て下さい。あの掲示板に依頼書が貼ってあります」

受付嬢の指差した方向にはコルクボードのような物があった。そこに様々な紙が貼られている。コルクボードが掲示板で、紙が依頼書だろう。

「あの依頼書の中に気に入った物がありましたら、それを受付まで

持って来て下さい。これで依頼の受注は完了です。ただし、ギルドにはランクというものがありまして……これを見て下さい」

受付嬢は書類の中から一枚の紙を取り出した。紙の真ん中に絵と文字が書かれていて、その横にアルファベットのような記号が書かれている。

「この横に書かれているのがランクです。FからSまでありまして、依頼だけでなく冒険者にもあります。あなたがたの場合、登録したばかりですからFランクですね。……ここまででわからないことはありますか？」

受付嬢は説明を中断した。そして颯太たちの顔を見回す。すると、イコが口を開いた。

「私たちは文字が読めないわ。だから掲示板を見ても何が書いてあるのかわからない」

「それでしたら、絵を見て下さい。また、条件を言って下さればこちらで条件にあった依頼を捜すこともできます」

「そうなの。なら安心」

イコは納得したのか後ろに一歩下がった。受付嬢は微笑むと、説明を再開する。

「説明を続けますね。ランクが二つ高い依頼までなら依頼を受けることができます。あなた方の場合、Dランクまでですね。ランクは今の自分達よりランクの高い依頼を受けることで上げることができます。一つ上なら五回、二つ上なら三回でランクアップできます。

……一応、これで主な説明は終わりました。あと細かいことはその都度聞いて下さい。ではカードを発行しますので少し待っててくださいね」

受付嬢はまた奥に引っ込んだ。そしてすぐに戻ってくる。その手には銀色のカードが三枚握られていた。

「これがあなた方の冒険者としての身分を証明するギルドカードです。なくすと大変なのでなくさないでくださいね」

受付嬢は颯太たちにカードを手渡した。カードには颯太たちの名前やランクが書き込まれていた。颯太たちはそのカードを手に取ってじっくりと丁寧に眺める。

「俺が冒険者か……。なんだか感慨深いな」

「冒険者に狙われたことはありますが……まさか私がなるとは思いもよらなかったですわね」

「金属？　かなりの加工精度。興味深いわ」

憧れの職業について興奮する颯太に、不思議な気分のメル。さらに純粋にカード自体に興味が沸いたイコ。颯太たちが三者三様の反応を示していると、受付嬢が最後を締める挨拶をした。

「最後に私から一言。カードを発行されたのであなた方はもう立派な冒険者です。それではどうぞ存分に頑張って下さい」

「はいっ！」

颯太たち三人の声が見事に揃った。受付嬢は深く頭を下げる。颯太たちもそれに応えるように頭を下げ、今日のところはそのままギルドから出て行こうとした。

だが、そうは問屋が卸さなかった。最後尾を歩いていた颯太の肩が誰かによってつかまれる。

「ぼうやっ！　お姉さんたちのパーティーに入らない？」

「いいや、兄ちゃんは俺達と一緒に男のロマンを追うんだよな！」

颯太の肩を二人の冒険者が捕まえていた。片方は色っぽいお姉さん、もう片方はゴツいオッサンだ。早くも颯太を自分達の仲間に勧誘しようというのだ。

「何よ、ダグラ！　この子は先に私たちが目をつけたのよ！」

「シェイこそ何を言うか！　俺達の方が先だ！」

二人は互いに言い争いを始めた。それはやがて後ろにいた彼らの仲間にまで飛び火する。一触即発。危険な香りが漂った。

「ふん、それならこの子自身に決めてもらいましょう。ねえぼうや、あなた仲間になるならこんなむさ苦しいオッサンたちより美人な私たちの方がいいわよね」

シェイが勝負をかけた。颯太に甘い声をささやき、しな垂れかかる。これでもかと言わんばかりの膨らみが押し付けられ、颯太の目元が緩んだ。彼は蕩けそうな顔をしてシェイを見つめる。

対するダグラはその様子に歯ぎしりしかできない。男がそんなことしても気分が悪いだけだ。こうして颯太がシェイのパーティーに入るのは確実かと思われたその時。無機質な声が颯太の前から聞こえてきた。

「颯太？　ふざけてないで行くわよ」

「は、はい！」

「よろしい。ごめんなさいね皆さん、私たちはこの三人で一つのパーティーなの。だから勧誘は受け付けられないわ」

颯太をシェイから引き離したイコはそう告げると、颯太を引っ張る。颯太は未だに名残惜しかったが、イコとメルの二人に引っ張られてしぶしぶ歩きだしたのであった……。

第十三話　大混乱（後書き）

感想・評価をお願いします。

更新停止のお知らせ（前書き）

重要なお知らせであります。

更新停止のお知らせ

このたびなのですが、この小説をひとまず打ち切りにすることを決めました。
気分が乗らずほかの小説が増えてしまい、そちらがメインとなってしまっているからです。
ですのでそちらが片付くまでこちらのほうを更新停止とさせていただきます。
楽しみにしてくださっていた読者の皆様には申し訳ありませんが、ご了承のほどなにとぞお願いします。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃
＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8762o/

異世界を巡る冒険者

2011年7月7日00時05分発行